

第15回 総会記念講演

『世界から見た静岡の魚』

ふじのくに地球環境史ミュージアム 渋川浩一



講演 県ミュージアム 渋川浩一教授



たくさんの人が記念講演を聞きに来られました

私はこれまで世界各地のフィールドを訪ね歩き、様々な自然環境やそこにすむ人々、生物に出会ってきました。静岡に居を構えた今、私は、この地の自然の豊かさ、生物の多様さにすっかり魅了されています。今日はそんな静岡県の生物、とくに私が研究対象とする魚類について、その研究史や魚類相の概要をお話したいと思えます。

静岡県の水域環境

静岡県は、じつに豊かな水域環境が見られる地です。日本一高い山。富士山から日本一深い湾。駿河湾まで、じつに6,000m以上に達する高低差は、陸水や海洋環境に様々な表情をつけます。海岸線は約506kmに及び、波あたりの強い岩礁域やそこに発達する藻場、砂浜。磯浜、アマモ場、浜名湖のような広大な汽水域、干潮時に出現する砂泥干潟…等々、多彩な沿岸環境で彩られています。黒潮の影響も強く、夏から秋にかけての季節には南方から来遊した色鮮やかな魚（死滅回遊／無効分散）が沿岸海域を賑わします。

「タテ」（垂直方向）に見ても「ヨコ」（水平方向）に見ても面白い。これ程までに多様な水域環境がコンパクトにまとまった地域も、そうはありません。いまだよく残る豊かな自然は、他県の研究者から羨ましがられるほどです。

静岡県と魚類研究

そんな静岡県には、古くから国内外の多くの魚類研究者が関心を寄せてきました。研究者にとっていかに魅力的な地であったかは、静岡県

に因む魚の多さからもうかがい知ることができます。

例えば、静岡県産の標本をもとに新種として発表された魚は109種を数えます。秋の味覚としてお馴染みのサンマも、その一つです。サンマは、ペリーが下田に来航した際に絵師に描かせた図をもとに、米国の魚類研究者ブレブルトによって1856年に新種記載されました。当時、もちろん地元ではよく知られた魚でしたが、欧米の研究者らが主導していた分類学の世界では、まったくの未知の魚だったのです。ちなみにブレブルトの報告にはペリー遠征隊が中国や日本の各地で集めた60種の魚が掲載されていますが、その半数は下田産です。それほどまでにペリーらは、下田の魚に興味をひかれていたのでしょう。

20世紀初頭には米国の魚類研究者ジョルダンとその弟子らが来日し、数多くの新魚種を記載、日本の魚類相研究の基礎を築きました。彼らの論文にも、静岡県産標本を基に新種記載された魚が40種も含まれています。その後も幾多の日本人研究者が静岡県産魚類を調査し、新魚種を続々と発表してきました。

静岡県下の地名が付けられた魚も少なくありません。「伊豆」の名が付いたイズカサゴ、「沼津市志下」に因むシゲハゼ、「駿河」に因むスルガハウネンエソ等々、和名だけでなく学名に付されたものも含めると、17種の魚がその例として挙げられます。

静岡県の魚類相 — どんな魚が、何種いるのか？

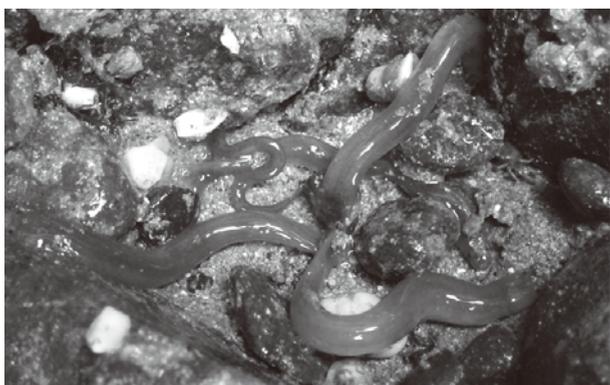
静岡県には、何種の魚がいるのでしょうか。



ミミズハゼ 興津川河口



ナガミミズハゼ近似種 静岡市用宗



ヤリミミズハゼ近似種とナガミミズハゼ近似種
下田市



多様な礫浜環境の存在が多く、ミミズハゼ類の生息を可能にしています

魚類研究が盛んな静岡県ですが、じつは現在のところ、明確な答えを誰も持ち合わせていません。

淡水魚については、NPO 会員でもある板井隆彦氏らによって 1970 年代から県全域で詳細な調査がなされており、現在までに 167 種が記録されています。問題は、海産魚です。駿河湾産魚類を調査し続けた黒田長禮氏は、一連の著作（1931～1974 年）の中で 1,016 種を記録しました。黒田氏のリストに浜名湖産魚類を追加する形で、松岡玳良氏は 1,163 種の静岡県産魚類を報告しました（1985 年）。最近では、駿河湾だけでも約 1,200～1,300 種もの魚がいるとする報告もあります。しかし残念ながら、静岡県産魚類相の全容は未だ定かではありません。

判らないのであれば、実際に数えてみよう、と、今回の講演に先立って少し調査してみました。情報源は、ミュージアムの収蔵標本や既存の文献類、インターネット上で公開されている画像データベース、さらには国内のいくつかの自然系博物館のご協力を得て参照した収蔵標本コレクションのデータベースです。文献情報には真偽の確認が難しい記録が含まれていることがよくあり、今回はあくまで標本や画像等といった「証拠」が明示されているもののみを厳選して調べました。

調査の結果、1,736 種もの魚を確認することができました。これは、現時点（2016 年 4 月 24 日時点）までに報告されている日本産魚類総種数（4,357 種）の約 4 割にも及ぶ数です。未だ調査が行き届いていない文献や博物館も少なからずあるため、おそらく種数は今後ますます増えるでしょう。ともあれ静岡県産魚類の種数は、これまで考えられてきた数よりもかなり多くなりそうです。

静岡県は、まだまだ奥が深い！

この他にも静岡県には、未だ報告されなかった新しい新顔の魚が少なからず生息しています。例えば私たちが数年前から調査を進めているハゼ科ミミズハゼ属魚類では、採れるものの大半が未だ名前（和名、学名）の無い“未知種”です。県内のごく限られた地域や環境にしか見られない種も、少なくありません。

魚のような脊椎動物でさえ、未知種が続々と見つかる静岡県。その底知れなさ、奥深さには驚くべきものがあります。素晴らしい自然を次代に継承していくためにも、まずはそこに「何が」「どのように生活しているのか」を知ることが重要です。今後はミュージアムを拠点に、じっくりと腰を据えた調査を進めていきたいと考えています。